２　　羽根という所　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　係り結びの法則

人みなまだ寝たれば、海のありやうもア（見ゆ）ず。ただ、月をイ（見る）てぞ、西東をば知りける。かかる間に、みな夜明けて、手洗ひ、例のことどもウ（す）て、昼になりぬ。今し、羽根といふ所に来ぬ。稚き童、この所の名を聞きて、「羽根といふ所は、鳥の羽のやうにやある」と言ふ。Ａまだ幼き童の言なれば、人々笑ふ時に、ありける女童なむ、この歌を詠める。

　まことにて名に聞く所羽ならば飛ぶがごとくに都へもがな

とぞ言へる。男も女も、「いかで疾く京へもがな」と思ふ心エ（あり）ば、この　　　　　　　　　　歌Ｂよしとにはあらねど、「げに」と思ひて、人々オ（忘る）ず。この、羽根といふ所問ふ童のついでにぞ、また昔へ人を思ひ出でて、いづれの時にかカ（忘る）。

【本文チェック】

①（　）ア～カの中の動詞を、正しく活用させて（　）に書きなさい。

ア（　　　　）　イ（　　　　）　ウ（　　　　）

エ（　　　　）　オ（　　　　）　カ（　　　　）

②　Ａ・Ｂの語の品詞を〔　〕に書きなさい。

A〔　　　　詞〕　B〔　　　　詞〕

③（　）に適当な語句を入れ、傍線部の現代語訳を完成させなさい。

言葉である（　　　　）

【語彙力 ✚】

問１　次の語句の意味について、空欄を埋めよ。＊〔数字〕はノート本冊での本文の行数を表す。

１　ありける（連語）〔４〕（　　　　　　　　　　　）

２　～もがな〔６〕　　　（　　　　　　　　　　　）

問２　次の傍線部の意味として最も適当なものを選べ。

１　中将こそ、参りたまふなれ。例の御にほひ、いとしるく。（堤中納言物語）

ア　いつもの　　　　イ　評判の

ウ　例えて言うと　　エ　相当な

（　　　）

２　かぐや姫、きと影になりぬ。はかなくしとして、げにただ人にはあらざりけりと思して、（竹取物語）

ア　とうてい　　イ　なんとまあ

ウ　全く　　　　エ　なるほど

（　　　）

【文法力 ✚】

問３　次の表の空欄を埋めよ。

|  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| こそ | か | や | なむ | ぞ | 係助詞 |
| 形 | 形 | 形 | 形 | 形 | 結び |
|  | ・ | ・ |  |  | 文法的意味 |

問４　次の傍線部の係助詞の結びの語を一単語で抜き出し、その活用形を答えよ。

１　やある。貸し給へ。（徒然草）

結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

２　の移りかはるこそ、ものごとにあはれなれ。（徒然草）

結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

３　その人、かたちよりは心なむまさりたりける。（伊勢物語）

結び（　　　　　　　　）　活用形（　　　　　　　　）

問５　次の傍線部を現代語訳せよ。

１　建仁寺の塔も度々の炎上にれたり。故あるにや。（沙石集）

（　　　　　　　　　　　）

２　明日こそ知らね、暮れぬ間の今日はあはれなり。（井関隆子日記）

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

３　「なほ誤りもこそあれ」とあやしむ人あり。（徒然草）

（　　　　　　　　　　　　　　　　　　）

【古典常識】

問６　日本文学史上で日記文学といえば、主に平安時代から鎌倉時代にかけての、女手といわれた平仮名で書かれたものを指す。その最初の作品は、紀貫之が女性に仮託して書いた『土佐日記』である。特に平安時代には、『紫式部日記』のように宮廷に仕えた女房によるものなどの、女流日記が多く見られる。最初の女流日記を次から一つ選べ。

ア　日記　　イ　日記　　ウ　日記

（　　　）

【解答】

【本文チェック】

①　ア＝見え　イ＝見　　ウ＝し

　　エ＝あれ　オ＝忘れ　カ＝忘るる

②　Ａ＝副　Ｂ＝形容

③　ので

問１　１＝先ほどの　２＝～たい

問２　１＝ア　２＝エ

問３　ぞ＝連体・強意　　　　なむ＝連体・強意

　　　や＝連体・疑問／反語　か＝連体・疑問／反語

　　　こそ＝已然・強意

問４　１＝ある・連体形　２＝あはれなれ・已然形　３＝ける・連体形

問５　１＝あるのだろうか　２＝明日のことはわからないけれども

　　　３＝間違いがあってはいけない

問６　ウ

【現代語訳・参考】

問２　１　宰相中将様が、参上なさったようだ。いつもの（き物の）御においが、たいへんはっきりとする。

２　かぐや姫は、さっと（実体のない）影になってしまった。（帝は）頼りなく残念だとお思いになって、なるほど普通の人ではなかったのだとお思いになって、

問４　１　蓑笠があるか。貸してください。

２　季節の移り変わっていくのは、（まことに）いろいろな物事につけて趣深いものである。

３　その人は、容貌よりは（とりわけ）気だてがすぐれていた。

問５　１　建仁寺の塔もたびたびの火事を免れた。何かわけがあるのだろうか。

２　明日のことはわからないけれども、暮れないうちの今日は感慨深い。

３　「それでもまだ間違いがあってはいけない」と危ぶんでいる人がいる。

問６　『日記』は平安時代中期の歌人藤原母の作で、『源氏物語』より前の成立である。